

わたしの一里塚

学級崩壊の現場から見出した コミュニケーションの力

教育実践研究家
菊池 省三きくち しょうぞう



1959年愛媛県に生まれる。山口大学教育学部卒業後、北九州市立小学校教諭として勤務。2015年に退職後、現在はその手法を広めるべく講演活動や教育アドバイザーを務める。

■コミュニケーションが子どもを変える

小学校の教員として20年以上、コミュニケーションを基盤においた教科指導、学級経営に取り組んできました。「褒める」ことを通じて「話す力」、「聞く力」を身につける。このような指導を1年間かけて行うことで、子どもたちは見違えるほど成長します。自分の伝えたいことを積極的に表現し、相手の意見を受け止められるようになるのです。

コミュニケーションの実践は、特別な子どもだからできるというわけではありません。私自身、学級崩壊に陥ったクラスの担任を何度も務めました。子どもたちはお互いの意見を尊重する態度を身につけ、教室を活発で温かみのある空間に変えてくれました。作文・読解指導が主流だった当時からコミュニケーションの実践に取り組むようになったのは、学級崩壊の現場に直面した苦い経験が元になっています。

■自己紹介ができない子どもたち

教員になって9年目のその年は、5年生からそのまま持ち上がった6年生の担任になりました。私だけが新しくクラスに入った形

だったので、名前と好きなものを発表する簡単な自己紹介をさせることにしました。ところが、発表のために前に立った何人かが急に泣き出し、泣かなかった子も小さな声でしかしゃべることができませんでした。それまで元気のよい子どもたちと共に日々を過ごしていた私にとって、初めて学級崩壊の現実を目の当たりにした瞬間でした。お互いを牽制し合い、自分を表現することすら躊躇するこの光景に、強い衝撃を受けました。

今までに培ってきた指導方法ではだめだと実感した私は、当時所属していた指導法研究会の師匠に相談を持ちかけました。すると、「1年かけて自分の意見をきちんと発表できる子どもに育ててはどうか」とのアドバイスを受けました。当時は「話す力」、「聞く力」の指導について詳しく扱った教育書や教材はありませんから、私は大いに戸惑いました。困った挙げ句、ビジネス書に載っているスピーチや会議のノウハウを紐解き、日々の学習指導に活かしていく試行錯誤の日々が始まりました。そして、あれこれ実践を繰り返しながら、知識を教えこむ一斉型の授業スタイルを、コミュニケーションを軸にスピーチや

児童同士の対話を重視する教科指導に変えていきました。がむしゃらに続けてみると、子どもたちにも確かな変化が見られるようになりました。少しずつ自分の意見を表現できるようになり、ギクシャクした関係もだんだんほぐれていったのです。卒業を迎える頃には、過去8年と比較しても突出して積極的でまよりのあるクラスに変わっていました。コミュニケーションには子どもを成長させる力がある。それまでの認識を強く改めるきっかけとなる1年間でした。

■「なんでそんなことせないけんのか」

コミュニケーションの魅力にとりつかれた私は、その後も研究を重ねていきました。子どもたちも、初めこそ戸惑いながらもしっかりと取り組んでくれたので、私なりに教室での実践を進化させることができたと感じていました。しかし、6年経ち、その指導法が通用しない学級に出会いました。授業中に対話を促しても、「なんでそんなことせないけんのか」と冷やかな反応が返ってくるばかりなのです。思いもよらぬ子どもたちの態度を前に、学級づくりや指導のあり方を根本か

から見直さねばならないと痛感しました。

子どもたちのそつけない態度の裏側には自尊心の低さがありました。それまでの学校生活で数多くのトラブルを経験し、その度に先生から叱られ、さらにそれらの問題が未解決のまま進級していったのです。表情には出さずとも、先生、学校、教育に対して、そして自分自身に対して諦めを抱いている様子が伝わってきました。それまでの私の指導法は、ダイベートなどの技術を授業に取り入れ、学びをよりダイナミックに展開することに重点を置いていました。そのような展開は、子どもと教師との間にきちんとした関係性があってこそ成り立っていたのです。その土台が揺らいでいる姿にハッとさせられました。そして、コミュニケーションを学級づくりの中心に据えて、しっかりと土台をつくり上げる必要性に気づきました。また、諦めの感情を払拭させるため、コミュニケーションを通じて育てたい人間像を明確に意識して指導にあたらなければならぬと認識を改めました。

具体的に教師やクラスとの冷えきった関係をどう改善するか、そして、一人ひとりに成長の可能性が秘められていることをどのようにして伝えるか。それらを必死で考えたときに思い出したのが、若い頃に師匠から教わった「長所接近法」という言葉でした。長所を見つけて「褒める」ことで、子どもたちとの関係性を築いていく。これを大原則に、多少時間をかけてでもクラスの一人ひとりとコミュニケーションをとっていけばよいのではないか。そして、「他者との対話を通して問題を解決していこうとする人間の育成」という目標に向けて、子どもたち同士で長所を見つけて褒めさせればよいのではないか。そのように考え、実践に移していききました。迎えた新年度の始業式の日、子どもたちは第1日目にもかかわらず自信のなさそうな目をしていました。そこで、体育館から教室に戻ってきてすぐのホームルームで、始業式の間に見つけておいた生徒一人ひとりの長所を褒めていきました。「○さんは、司会の先生がその場に立ちましようと言ったとき、いちばんに立ちました」、「○さんと○さんは、気をつけと言われたときにかかちがちゃんとそろっていました」など、全員のよいところを必ず取り上げて発表しました。それまで褒められる機会の少なかった子どもたちの目つきがはつきりと変わりました。その後、私から褒めるだけでなく、子どもたち同士で長所を見つけて発表させる活動も徐々に取り入れられました。褒めることは、子どもの振る舞いに自信をつけさせると共に、何がよいことなのか、行動の模範をクラスに示すことにつながりました。お互いがお互いの長所をまねして、やがて自分勝手な行動をとる子どもはいなくなりました。双方向のやりとりを1年通して続けた結果、意見が活発に飛び交う積極的なクラスに成長しました。

■「褒める」ことで豊かな関係性を築く

学級崩壊の起きているクラスは、必ずどこかでコミュニケーションがうまく機能していません。「うざい」、「きもい」といったマイナスの言葉が蔓延するなかでは、そのような関係性しか生まれず、ギクシヤクした付き合いしかできないのです。プラスで価値のある言葉を用いて子どもたちを褒めることは、コミュニケーションを通じてお互いを尊重する態度を養うことにつながります。子どもたち自身も、マイナスの言葉の世界から解放され、相手とよい関係性を保ち続けられる心地よさを実感したからこそ、積極的な姿に成長できたのだと考えています。

このような構図は、大人同士の間柄でも同様に見られると思います。コミュニケーションによって良好な関係を築くことができず、嫌な思いをさせてしまった経験のある方も多いのではないのでしょうか。そこで、些細なことでも構わないので、ぜひ相手のことを褒めてください。叱られるよりも褒められたほうが嬉しいのは、大人も子どもも一緒です。訓練をすれば誰でも上達するので、実行してほしいと考えています。

私は、コミュニケーションの力によってより豊かな社会が生まれると信じています。大人も子どもも、自分を表現し、相手を受け入れることによって、豊かな関係性を築いていってほしいと願っています。